

MIYAMOTO MUSASHI

宮本武蔵は1584年、播磨国(現在の兵庫県)に出生。わずか13歳で新当流の有馬喜兵衛に打ち勝って以来、世に知られる吉岡一門との決闘や佐々木小次郎との巖流島の戦いなど、28、9歳までの間に60余度の真剣勝負をし、一度も敗れることはなかったという。その後、さらに武士の道を追究し兵法の深奥を極め、自らの剣法「二天一流」を創始した。武蔵が熊本にきたのは1640年、57歳の頃。肥後熊本藩初代藩主 細川忠利に客分待遇で迎えられ、以降1645年初夏に没するまでの晩年5年間を熊本で過ごした。その間には茶・禪・書画などをたしなむ日々を送り、独自の感性が表れた唯一無二の水墨画作品を残している。そして、金峰山(現・熊本市西部)山麓にある洞窟、霊巖洞にこもり、自らが極めた兵法の道を後世に伝えるため「五輪書」を著した。

日本史上最強の剣豪との誉れ高い宮本武蔵。幾度の命を懸けた勝負に打ち勝ち、生涯不敗を貫いた男だが、若くして兵法の道を究めて勝利していたわけではなかった。戦いの状況をとらえ、相手の心理をとらえ、常に“相手に勝つ”ための最善の手段をあらゆる勝負の場で実践してきたからに他ならない。その後も、なぜ勝てたのか、なおも深き道理を追究するため朝夕鍛錬を繰り返し、その真理に辿り着いたのは50歳を迎えた頃だったという。晩年、自らの戦いの人生を振り返り、武士の生き方を、奥深き兵法の道理を後世に受け継ぐための集大成として記したのが「五輪書」である。

この五巻にわたる書物は、無論、単なる剣術を教えるものではない。己が極めた兵法の道は、武道に限らず、すべての道に通ずる。「万事において我に師匠なし」そう言い切った武蔵。過去のいかなる学問や教えからも言葉を借りず、自らが到達した二天一流の道理を五巻に分けて、あくまでも論理的に記述した。常に精神と知覚を磨き、あらゆる場面で相手に打ち勝ち、自らの道を切り拓くための実践的な方法論は、人が生きる上で普遍的な価値を持つものだった。

The Story of THE BOOK of FIVE RINGS

Miyamoto Musashi, Master Swordsman and Tactician,
Who Lived in Kumamoto.

— 大剣豪・兵法家 宮本武蔵が生きた熊本 —

NEO ONE
KUMAMOTO





THE *Earth* CHAPTER（地の巻）

「地」とは地盤、基礎を表す。まず兵法とは何か、武士とはどのような存在であるべきか、その正しい道を極めるための地盤について述べている。社会における武士としての生き方、戦いの場において二刀を使う合理性、あらゆる武器を駆使して勝つことの意義。常に合理的であれ、実践的であれ。武蔵が築いた二天一流の全体像をつかむのが地の巻である。

THE *Water* CHAPTER（水の巻）

「水」は一滴でも大海に変容できる。戦いの場において、常に水のように柔軟に相手と戦うための実践的な鍛錬の仕方について指南している。戦いに臨む精神のあり方、身体の姿勢。五つの基本的な構えを習得したうえで、実践ではその構えにとらわれることなく、変幻自在に戦うべきこと。一対一で敵と対峙した時の駆け引きと、いつ何時でも勝つための方法が水の巻に記されている。

THE *Fire* CHAPTER（火の巻）

小さな「火」でも燃え上がれば大火となる。たとえ一人でも多勢に打ち勝つことができるという、合戦を想定した実践的な方法論だ。戦いの状況を見極め、敵を不利に、自らを有利にし、主導権を握るための精神のあり方と態勢がある。常に敵の心理を読み、自ら仕掛けることの必要性。口先の理論ではなく、勝つためにあらゆる手段を尽くす応用論が火の巻で述べられている。

THE *Wind* CHAPTER（風の巻）

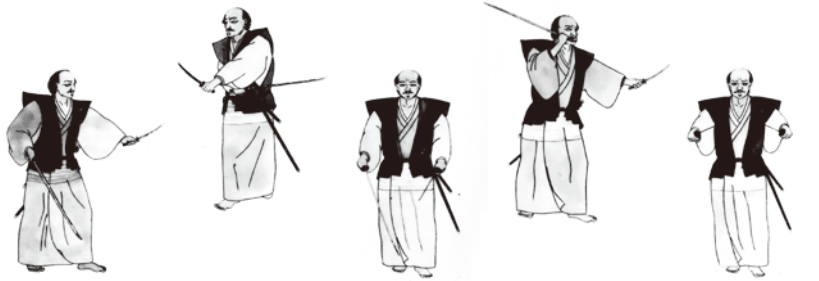
「風」とはスタイルを意味する。他流の道を知らねば、自らの二天一流の真理は見えてこない。他の剣術の流派には構えや太刀使いの様々なルールが存在するが、そんなものにとらわれていては、命を賭けた戦いの場では勝つことはできない。固執を捨てて、真理を見極めよ。他流を知って、自らの兵法の道の正しさを述べるのが風の巻だ。

THE *Void* CHAPTER（空の巻）

「空（VOID）」とは、物事のないところ、いまだ認識できないところを表す。何事も、道理の有るところを知ってこそ、無きところを知ることができる。空には善があって、悪はない。究極の自由の境地だ。

最後となる空の巻には、短く、簡潔に武蔵の意志が述べられた。我が兵法の道を極めれば、空の境地に達することができる。何者にも左右されることのない、迷いなき自由の心へと。

武蔵は先の四巻で繰り返し云った。“吟味せよ、工夫せよ、鍛錬せよ”と。そうすれば、おのずと道は拓けるのだ。



Reigan-do Cave（霊巖洞）

現在の熊本市西部に位置する金峰山の山麓。鬱蒼とした緑が生い茂る中に姿を現す切り立った断崖に、ぽっかり口を開けた洞窟がある。死期が近いことを悟った武蔵が、俗世を離れ、二年の間籠って五輪書を執筆した場所である。己の生涯を振り返り、到達した兵法の真理を後世に残すため、この地を選んだ。うつろいゆく四季と静寂の中、男は洞窟内の巨大な岩に座禅を組み、どのような景色を見て、何を思いながらその時を過ごしたのだろうか。

□住所：熊本市西区松尾町平山589（雲巖禅寺内）
□電話：096-329-8854（雲巖禅寺） □営業時間：8:00～17:00
□定休日：無休 □料金：大人200円、小人100円



Kumamoto Castle（熊本城）

戦国武将加藤清正によって、1601年から7年の歳月をかけて築城された熊本城。400年を超える歴史があり、日本三名城にも数えられる。敵を寄せつけないよう高くそそり立つ「武者返し」と呼ばれる石垣は圧巻。広大な敷地の中、ひとときわ高くそびえる天守閣は、熊本のシンボルとして長年街を見守ってきた。肥後熊本藩に客人として迎えられた武蔵は、戦いの人生で見出してきた兵法の道を当時の藩主細川忠利に説いたという。武蔵の精神がいまなお受け継がれる場所だ。2016年4月に発生した熊本地震により甚大な被害を被ったが、多くの支援に支えられながら復興への道を歩み出している。

□住所：熊本市中央区本丸1-1 □電話：096-352-5900



Musashi-zuka Park（武蔵塚公園）

宮本武蔵が葬られた墓のある公園。武蔵の亡骸は、甲冑を着けたまま立ち姿で埋葬されたという話も伝わっている。藩主細川忠利に客分として迎えられ晩年を熊本で過ごした武蔵は、死後も藩主を見守りたいという遺言を残した。そのため参勤交代の行列が通る街道沿いに墓が建てられ、現在の武蔵塚公園となっている。二刀を構え、堂々たる風格で立つ武蔵の銅像が迎えてくれる。園内には日本庭園や茶室などもある。

□住所：熊本市北区龍田町弓削1-1232
□電話：096-245-5050
□営業時間：常時開放



Shimada Museum of Arts（島田美術館）

熊本に残る武人文化の貴重な歴史資料や古美術品が保存されている。大剣豪宮本武蔵が用いた実物大の刀や木刀に驚かされるだろう。武蔵が晩年を過ごした熊本でたしなんだ諸芸の中でも、彼の鋭敏たる感性と気迫が見事に表現された水墨画作品は、日本水墨画史上でも異彩を放つ。没後に創作された数々の錦絵や肖像画など、宮本武蔵という人物を知る上で必ず訪れてほしい場所だ。

□住所：熊本市西区島崎4-5-28 □電話：096-352-4597 □営業時間：10:00～17:00（入園16:30まで）
□定休日：毎週火曜 ※但し祝祭日の場合は開館※年末年始 ※展示替え、館の都合により休館することもあり
□料金：大人700円、大学・高校生400円、小・中学生200円



Suizenji Jojuen Park（水前寺成趣園）

武蔵を熊本に招いた肥後熊本藩初代藩主細川忠利の命で造られた広大な日本庭園。園内には、湖に見立てた池が配され、常に湧き水が出て豊かな生態系を育んでいる。ゆるやかな起伏の築山と緑豊かな木々に囲まれ、日本文化の粋が凝縮された庭園美を楽しめるだろう。庭園を最も美しく眺めることができる位置に建てられた「古今伝授の間」では、景色を眺めながら抹茶と和菓子を楽しむことができる。

□住所：熊本市中央区水前寺公園8-1 □電話：096-383-0074
□営業時間：【3月～10月】7:30～18:00（入園17:30まで）、【11月～2月】8:30～17:00（入園16:30まで）
□定休日：無休 □料金：大人（16才以上）400円、小人（6～15才）200円



宮本武蔵の残した五輪書の精神は、遙かなる時を超え、いまに受け継がれる。日本のみならず世界各地で翻訳・解釈がなされている。そこにあるのは、時代も国境も文化も超えた、普遍性。ビジネス、スポーツ、芸術、学問、各人の人生の指針となる。複雑を極める時代に生きる私たちこそ、この五輪書が提示する生き方に触れてみるべきだろう。

武蔵は死の直前、己の歩んだ道を振り返り、「我、事に於いて後悔をせず（我は何事においても後悔をしない）」という一節を残した。偉大な剣豪であり兵法家として激動の人生を送った男が最期にたどり着いた境地。晩年を過ごしたその生涯を終えた熊本の地で、彼の足跡をたどっていただきたい。

